被災の産直　春芽吹く

宮古 出崎組合

仮設テントで第一歩

宮古市内の産直で組織する市地産地消推進事業実行委主催の産直イベントは29日、同市栄町の宮古駅西広場で始まった。津波でシートピアなあど内の販売所が被災した出崎地区産地直売施設組合（山崎時男組合長）が、根強い人気の地元産野菜や加工品などを販売。営業再開を待ちわびたなじみの客で売り場は活気にあふれ、市内の農家は復興への一歩を踏み出した。

にぎわい　新鮮な野菜などがずらりと並び、買い物客でにぎわう産直市

「これはサービス」「そのまま食べてもおいしいよ」。商品を手に取って品定めする買い物客に組合員が元気な声で話し掛け、自然と会話が盛り上がる。レジには、かごいっぱいに商品を詰めた買い物客もみられ、ＪＲ宮古駅前の売り場は大勢の人でにぎわった。

午前8時の開店と同時に足を運んだ宮古市大通3丁目の小笠原喜和子さん(74)は「ファン」という手作りみそなどを購入。「生産者が見える商品は安心して食べられる。ずっとの営業で２００人以上が訪れ、組合員の予想を超える約16万円を売り上げた。

イベントは復興への第一歩。組合員が常設店での営業再開を目指す強い意志も込められている。

近年、年間約1億1千万円を売り上げるまでに成長した同組合も、2003年のオープン当時は「海のそばにある産直なんてはやらない」という声もあったという。山崎組合長は苦労して売り上げを伸ばしたこれまでを振り返り「大変な時でも、やればできる。消費者とのつながりを保つためにも、やめるわけにはいかない」と営業再開に思いを込める。

同組合は今後、ほかの産直施設にも参加を呼び掛け、イベントの規模を拡大したい意向だ。

イベントは5月8日まで、営業時間は午前8時から11時まで。9日以降は開催回数を週数回にするなどして継続する方針。

再開祝う　青空の下、仮設テント脇にはシダレザクラが咲き、まるで開店を祝うよう

笑顔咲く　久しぶりの販売再開に笑顔あふれる組合員たち

宮古市の復旧状況

避難者数は1946人（22日現在）。上水道は倒壊家屋などを除き復旧した。仮設住宅は1188戸の建設を予定している。国道45号は市内全域通行可能。ＪＲ山田線は宮古―盛岡間を運行。宮古―岩手船越（山田町）間はバスの振り替え輸送。昨年の脱線事故で休止しているＪＲ岩泉線はバスを運行。三陸鉄道は宮古―小本（岩泉町）間を１日４往復。

（市災害対策本部発表、28日正午現在）

東日本大震災から50日。愛する家族を奪われ、家や職場を失った傷痕は今なお深い。それでも、被災者はあすを信じ、生活再建に向かい長い道のりを歩んでいる。被災地を中心に復興に向けた取り組みに焦点を当て、立ち上がろうとする人たち、それを支援する人たちの姿を随時紹介します。

立ち上がろう　岩手

とても感激した一日

宮古市花原市　農業　小林　亮子さん(72)

午前3時から起きて、がんづきやまんじゅうなどを作った。手作りみそも置いたが「これが欲しくて」とお客さんから声を掛けられた。とても感激した一日となった。自分の畑で収穫した小麦粉などを材料に、

大好きな雰囲気再び

宮古市老木　宮古高3年　中舘　陽香（はるか）さん(18)

和気あいあいと生産者と買い物客が談笑する光景は震災前の店舗で見た光景と変わらない。大好きな雰囲気にまた会うことができた。みんな元気な姿で野菜運びなど、お母さんの手伝いで来た。安心した。

買ってもらえる喜び

宮古市老木　農業　上野　政隆さん(35)

約40アールのビニールハウスで栽培したホウレンソウや小松菜、キュウリなどを並べた。東日本大震災後、売る場所がなくなり困っていただけに、ようやく地元の人に買ってもらえる喜びをかみしめている。

間に合ったPカード

宮古市田代　農業　村上　裕敏さん(51)

再開初日から間に合わせることができてうれしい。買い物客からも大変好評だった。担当するクラウドコンピューティングで、顧客情報を津波から守れたおかげだ。

生きがいなくせない

出崎地区産地直売施設組合の事務局長を務める岩間良明さん(58)＝宮古市高浜1丁目＝は、なりわいのコンブ養殖で大打撃を受け、避難所生活を送りながらも組合の再建に全力を尽くす。「愛着ある組合。組合員一丸で乗り越えたい」と誓う。

岩間さんは、組合が設立された2003年から唯一の漁業者として務局長。産直には乾燥コンブを出品していた。漁業は33歳から。亡き父の跡を継ぎ、昨年からは宮古漁協理事を務める。

地震発生時、宮古市港町に妻明美さんが経営する学習塾でくつろいでいた。高台へ避難すると、毎日通っていたシートピアなあどが津波に襲われる残酷な景色が広がった。「映画を見ているみたいだった」

1週間後、シートピアなあど内で陳列棚から金庫まで何もかもなくなった光景を目の当たりにした。

「それでも立ち上がろう」。組合の役員会で再開の道を探り、宮古駅前でのイベントに可能性が膨らんだ4月中旬。組合員の表情が一気に明るくなったのが分かった。

自らは、自宅と小型船を失い、2年連続の津波で養殖コンブも壊滅的被害。先は見通せないが、漁業復興との二足のわらじを脱ぐ気はない。

「2年連続1億円の売り上げなど産直を育て上げてきた自負がある。何よりの生きがいとなっているこの場をなくしたくはない」と前を見据える。

組合員一丸、再建に情熱

「このイベントは『再出発したい』」という組合員一致した気持ちの表れだ」と話す岩間良明さん

組合事務局長の岩間さん

新鮮で安い野菜多い

宮古市金浜の老人福祉センターで避難所生活　菊池　厚子さん(69)

ぐに食べられるものを買った。産直は新鮮で安い野菜が多く、よく利用していた。生産者が手間をかけて作っているものなので、スーパーの商品と比べても やっぱりおいしい。だんごや漬物など生活しているみんなです

食べるなら地場産物

宮古市板屋　飲食店従業員　菊池　秋宏さん(33)

産直の野菜は見て分かるくらい鮮度が違うし、旬のものがそろっている。スーパーよりも価格が安いので、食べるなら地元のものがいい。生産者の皆さんは頑張ってほしい。販売を再開すると聞いて商品を見に来た。

できるだけ店開いて

宮古市新町　主婦　本田　美樹子さん(47)

名前を出して売っているので、品質に当たりはずれがない。震災前は毎日のように買い物をしていたので、今後もできるだけ多く店を開いてほしい。値段が安いのも魅力。再開を楽しみにしていた。産直は生産者の

地域のため頑張って

宮古市末広町　中村　元一さん(81)

震災当日の午前中も買い物に行った。新鮮な野菜、山菜がそろう産直の良さをあらためて感じた。店を継続するのは大変だと思うが、地域の活性化に向け頑張ってほしい。産直には散歩のついでに毎日通っていて、

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。